

帝都地下迷宮

中山七里

第八回

3

久ジイの告白は予想の範囲内だったものの、それでも本人の口から語られると相応に衝撃を受けた。

「文科省の口利きで地下の生活を勧められたんですか」

「ああ。それが今度は警察から追い出される羽目になるとはな」

久ジイはこの期ごに及んでも、まだ国の態度の豹変ひょうへんぶりを信じられない様子だった。

「その時の窓口になった職員を憶えていますか」

「直接の窓口になってくれたのは間宮先生だったが、珍しい名前だったからわしも憶えとるよ。宇賀神うがじんという男で元々、警察庁から出向していたと聞いておる」

普通、キャリア組と呼ばれる国家公務員が入庁した省庁から転属されることは少ない。ただし、一年から二年の間に出向というかた

ちで異動するのはよくある話だ。

「久ジイ。それってすごく怪しいですよ」

「どこがだい」

「八ヶ部町で放射能漏れ事故が発生した頃、福島第一原発事故の後ということもあって、さすがに政府は原子力行政の見直しを図りました。例の、三十年後には原子力による電力供給を二十パーセントに抑えるという政治方針です」

「憶えておるよ。むしろも被害者だったから、原子力に頼らない電力供給というのには諸手を挙げて賛成した」

ところがその直後に政権交代が起こり、新政権は原子力発電への依存度を抑制するという決定はそのままに、しかし実際は停止していた原発を再稼働させたり新たな原発の建設を画策したりと、一つの前の国策に回帰する素振りを見せているのが現状だった。

「その宇賀神という役人は、元々も警察庁からの出向組なんですよね。出向していても元の官庁に戻ることが決定しているのなら、いずれへエクスペローラー」を警察庁の監視下に置くことを念頭に置いていたんじゃないんですか」

「そうは思いたくない」

久ジイは小日向の視線を避けるように顔を逸らした。

「地下での生活を勧めてくれた宇賀神さんは、そりゃあ優しい人だ

った。国策の犠牲にするように申し訳ないと、何度も頭を下げてくれた」

「それで久ジイたちが納得してくれるのなら、頭なんていくらだつて下げますよ。頭下げるのはタダですからね」

小日向は日頃の自分を顧みながら言う。抗議やクレームが来た時、まずは直接の担当者が頭を下げる。それで相手の溜飲りゆういんが下がるのなら、これほど安上がりなことはない。

「それほど中央官庁に詳しい訳じゃありませんけど、今回警視庁公安部が動いているのは宇賀神さんの意向が働いているような気がします」

「つまり、宇賀神さんは輝美さんの素性を承知した上で、わたちらと行動をともにさせたという推論かい」

「僕は妥当な推論だと思います。そうでなかったら、輝美さんがあっさり八ヶ部町の住人扱いされた経緯が納得できませんよ。久ジイだって、その宇賀神さんの紹介だったからこそ、偽の素性を信じてしまったんでしょう」

萬世橋駅からの移動を説得するためには、久ジイに危機感を持ってもらう必要がある。国の厚意には裏があったと認識してもらう必要がある。

「久ジイ。公務員の僕がこんなことを言うのも変ですけど、国のす

ることには優先順位があります。もし住民の生活の保障と国策が衝突した場合には、当たり前前に国策が優先します」

「わたしたちを追い立てるのが国策というんかね」

「追い立てるといふより、危険視していると云った方が正確でしょう。公安部の刑事が潜入していたのは何よりの証拠です」

「危険視とはな。いったいわしらのどこが危険なんだ。病人と年寄りかほとんどだぞ」

小日向は胸が詰まる。社会的弱者は時として強者に成り得る場合がある。社会的弱者というハンデイが、相手には見えない圧力として作用するからだ。

「病人と年寄りの集団を脅威と考える者もいるんです。まだまだ世の中には、弱い立場の人間を応援しようとする人が多いですから」

「君もなのかね」

久ジイの目がこちらを覗き込む。

「小日向くんよ。あんたの職場にも刑事がわんさか詰めかけて迷惑だっただろう」

「……日常業務に支障が出ました」

「そして今また、わたしたちに居住区の移転を進言している。進言するからにはある程度の候補地も念頭にあるだろうし、小日向くんの性格では、目的地だけを告げてわたしたちを放り出すつもりではない

だろう」

「もちろんです。廃駅マニアだから、管理が手薄になっている箇所も知っています。皆さんを先導したいと」

「そんなことをしていたら、あんたはますます警察から疑われる。職場からますます疎んじられる。現状わしらは萬世橋駅に不法侵入し不当に占拠しておるから、犯罪者と言っても過言じゃない。公務員が犯罪者に加担したとなれば、小日向くんもお咎めなしという訳にはいかんぞ」

「そう、でしょうね」

「今日び公務員になるのも大変だ。あんただってそれなりの勉強や苦勞の末に、今の職場に採用されたんじやろ。わしらに加担したら、その苦勞も将来も棒に振りかねんのだぞ」

久ジイの言葉はこちらの覚悟を確かめるものではない。

最後の最後に逃げるきっかけを作ってくれているのだ。それなら、こちらも改めて決意を示すのがスジというものだろう。

「さつき一蓮托生いちれんたくじょうと言ったはずです」

「本当に、それでいいのかい。あんたには自分以外に護るものがあるんじゃないのかい」

「僕はあなたたちを護りたいんです」

我ながら気障きざむな台詞せりふだと思ったが、不思議に気恥きぢずかしさはなか

った。むしろ今まで胸に溜めていたものをやっと吐き出したような爽快感がある。

「そうか」

久ジイはそう言って、小日向を直視した。

「そうか」

繰り返した後、合点する^{がてん}ように一度だけ頷いてみせた。

「それならわしはあんたに従おう」

胸を撫で下ろしたところで、線路の向こう側からスーツケースを引きながら駆けてくる人影を認めた。

「すまない。遅くなった」

久ジイの許にやってきた間宮はすっかり息が上がっていた。

「やっと、急患が片づいて」

「ご苦労さんだったねえ、間宮先生」

「ここを移動すると聞いた」

「そのことなんだがね」

久ジイは小日向の勤め先に公安部と刑事部の刑事がそれぞれ訪ねてきた経緯を説明する。

「わしとしては小日向くんの意見に従うつもりだが、間宮先生の意見はどうかね」

小日向は複雑な思いで久ジイの言葉を聞く。(エクスプローラー)

は共産制のような形態を採っており、長老である久ジイの意見も絶対ではない。全員を動かすとなれば間宮の賛同も必要という次第だ。

間宮は地下住人の中に大勢の患者を抱えている。中には単独で動けない者もいる。そうした状況下で、住人を一斉に移動させることには難色を示す可能性が高い。そうなれば移住計画はこの場で頓挫とんざしてしまう。

だが、間宮の返事は意外だった。

「分かった。住人全員を集めて、できるだけ早く移住させよう」

「いいんですか」

小日向は思わず訊いてみる。

「住人の中には一人で身動きの取れない人もいるし」

「一人で動けないのなら、他の動ける人間が介助してやればいい。

とにかく早く、ここから移るべきだ」

「思いきりがいいですね」

「危険を感じているのは君だけじゃない」

間宮の表情には、はつきり焦燥しやうぞうが現れている。

「先生の方にも何かあったんですね」

「警察が動き始めたから、わたしの方でも様子を探ろうとしたんだ。八ヶ部町の住人をここに移転させる際、わたしが窓口になったことは聞いているか」

「さつき、久ジイから教えてもらいました。当時、警察庁から出向していた宇賀神という人ですよね」

「現在、彼は警察庁に戻り、政策評価審議官を務めている」

政策評価審議官といえば長官官房付きのポストで、将来は警察庁長官を狙える位置だ。まさかそんな役職の人間とは思っていなかった。少し身構えてしまった。

「彼個人のアドレスを教えられていたから、何度か連絡を試みたんだが、未だに応答がない。無視を決め込んでいるとしか思えない。危険だ。この上なく危険だ」

「宇賀神さんが公安部を動かしているってことですか」

「それはわたしにも分からない。分かっているのは、国が原子力行政について一層悪い方向に舵を切り始めていることだ。小日向くんも知っているだろう。近々与党の総裁選が行なわれる」

「ええ。確か秋口に予定されていますよね」

「次期総裁候補の曾根内閣官房長官は、以前から原子力行政の拡大を主張してきた人物だ。福島第一原発の事故以降は慎重に口を閉ざしてきた。だが、元々産業界との関わりが深かった曾根官房長官のことだ。次期総裁に当選したら、必ず原発再稼働を一層推進させるに違いない」

これは小日向にも分かる道理だ。首長選挙では至極当たり前だが、

選挙民のみならず地元経済界の支持を取りつけた者が俄然有利となる。総裁選挙も後々の支持率を考慮すれば、産業界の思惑と期待を無視する訳にはいかない。

「そして官房長官は警察庁の出身で、当時の部下が宇賀神さんだった。これが何を意味するか、もう分かるよな」

「口封じ……」

「分かりやす過ぎて馬鹿らしいくらいなんだが、へエクスプローラ―は原発事故の生き証人だ。放射能漏れの影響で八ヶ部町住民のDNA修復機能が異常を起こしたことは、まだ報告されていない。

診断結果を公表しないことが、全員を地下に住まわせる条件だったからね」

横にいた久ジイがこくりと頷く。久ジイの心情を事細かに暴くつもりはないが、地下に移った頃はそうした条件を呑むことに逡巡しゆんじゆんなり憤りがあつたに違いない。放射能被害で一番過酷な現実を隠蔽いんぺいするのと引き換えに住民の生活を保障する。交換条件と言えば聞こえはいいが、実態は住民の生活権を人質に取られ、政府の失策隠しに協力しただけの話だ。

「被害住民の大半は高齢者だ。乾皮症かんびしやうを患ったまま地下に暮らしていれば、早晚人数は減っていく。緩慢かんまんに口封じを実行しているのと同じだ。だが原発推進派の曾根官房長官が総理総裁になった瞬間、

国策に邪魔な要素は排除される」

「その先兵が公安部だということですか」

「刑事部は犯人を逮捕するのが仕事だが、公安部は国の掲げる思想と方針を妨げる者を取り締まるのが目的だ。原発事故が発生した直後、各地で大小の反対運動が起きたが、厄介なことにこの時極左の連中が紛れていたのが仇あだになっている。つまりは反原発に名を借りた左翼運動なんだが、これが公安部の取り締まり対象になっている。同じ文脈で原発事故の被害者も対象になっている」

「〈エクスプローラー〉の中に極左の運動家が紛れ込んでいるという可能性ですね」

「可能性だけで取り締まり対象にはなるからな。しかし、それはあくまで大義名分だ。原発推進派にとって、原発被害者はいてはいけない存在だ。公式に存在が認められていない被害者なら、このまま闇に葬っても誰にも気づかれぬ」

「でも、百人いるんですよ。いくら何でも」

「忘れたのか小日向くん。ここにいる全員は住民票上の住所地があるにも拘かわらず、ほとんど家を空けている。そういう人間がある日消息を絶ったとして、何人の隣人が警察に届け出ると思う」

小日向は返事に窮する。自分にしても隣に誰が住み、何をしているのかなど気にかけてこともない。

「公安部の刑事、黒沢輝美が死体で発見されたのは、彼らにとっては逆に僥倖きようしやうだったのかもしれない。犯罪捜査の名を借りて原発事故の被害者たちを狩れる訳だからな」

間宮の言説は小日向の危惧きぐをより克明にしたものだったので、反論するつもりは全くなかった。

二、三日前だったら一笑に付していた推論だ。しかし実際に公安部の柳瀬と柵くぬぎや矢から事情聴取を受けた後は絵空事で済まなくなつた。平穏な生活を送っていた無辜むこの人々が、ある日を境に危険人物と指定される。お手軽な謀略小説のようだが、我が身に起こってしまえば現実と認めざるを得ない。

「わたしにも公安部の真意なんて分からない。だが諸々の状況を考えれば考えるほど、ここに留まるのが危険なのは明らかだ。だから、今すぐ移動させたい」

間宮は抱えていた大型のスーツケースを見下ろす。

「何人かの患者のため、薬剤と器具を詰め込んでおいた。移動中に具合が悪くなっても応急処置だけ是可以。久ジイ、いますぐ住人を集めてくれ」

「永沢さんと香澄ちゃんよ。頼めるかい」

「任せろ」

「すぐに集めてくるから」

ひと言ずつ残して永沢と香澄は住人の住まう場所へと走り去っていく。

「さあ、わたしたちは計画を詰めていこうじゃないか」

間宮はこちらの方にぐいと顔を寄せてくる。

「先生の方はいいんですか」

「何が」

「公安部が（エクスプローラー）狩りをするというのなら、宇賀神さんとの折衝役せつしやうだった間宮先生も当然マークされています。僕たちと行動をともしたら危険じゃないですか」

他の（エクスプローラー）たちと違い、間宮には医師としての地位もあり、財産もある。診療所では自分の患者も抱えている。決して身軽な立場ではないはずだ。

「いくら開業医でも、逮捕されてしまったら……」

「それは小日向くんだって同じだろう」

間宮は疲れたように笑ってみせる。

「わたしは元々八ヶ部町民だし、彼らの主治医でもあるから同行する義務がある。しかし君なんか趣味が昂こぶじて巻き込まれたようなものだ。それでも行き場を失くした彼らのために、公務員としての立場を捨てようとしている」

そして小日向の肩に手を置く。

「ちょっと利口なヤツだったら、そんなことはしない。(特別市民)なんて内々の取り決めも一方的に破棄できる。それでも八ヶ部町民たちに肩入れして公安部から護ろうというんだから大したヒーローじゃないか」

正面切つて言われると、急に顔が熱くなった。

「さて、君の移動計画を聞きたい」

「二段構えでいこうと思うんです」

小日向は久ジイと間宮を前に説明を始める。

「隣の神田駅から銀座線で表参道駅に向かいます。現在使用されている表参道駅ホームの奥に昭和時代の旧駅が残っているんです」

小日向は自分のスマートフォンを取り出し、画像を検索する。以前廃駅巡りをしていた時に撮影した旧表参道駅の画像だった。

昭和十三年に青山六丁目駅として開業された駅は、翌年神宮前駅に名称が変更された。当時は乗り換える毎ごとにいったん地上に出なければならなかった。それが昭和四十七年に千代田線表参道駅と統合された際、乗り換えが円滑えんかつにできるように現在のホームが新設された。ただし工事の都合上、旧駅のホームはそのまま残存しているのだ。

「三十四年間の長きに亘わたって使用されていたホームなので、広さは充分にあります。今は資材置き場になっていて関係者以外は立ち入

りできないようになっていきますけど」

「確かに広いな」

画像に見入っていた久ジイが呟く。

「しかし現行のホームと地続きになっているじゃあないか。これでは電車の中から丸見えだ」

「資材置き場だから、ブルーシートや段ボールで囲ってしまえば違和感はなくなります」

「ふむ。わしらはブルーシートのテントの中で暮らす訳か。しかし、そんなに大きなブルーシートでいつまでも隠れ果せるとは思えん。駅員にも不審に思われるんじゃないのか」

「だから二段構えなんですよ」

小日向は次の画像を映し出す。液晶画面に現れたのはほとんど明かりのない、薄暗いホームだった。

「これは博物館動物園駅です。京成電鉄の駅だったんですけど老朽化と利用者の減少で、平成九年に営業を停止しています。現在は東京都美術館の資材倉庫になっています」

久ジイが感心したように覗き込む。

「ほう。さっきの表参道駅よりも広いし、ここは電車が通らないんだな」

「そうです。ただここからは距離がありますし、百人全員の生活拠

点にするには相当の時間が必要になると思うんです」

「そうか。いったん表参道駅に移動して警察の監視から逃れ、その隙を突いて博物館動物園駅に再度移動しようというのか」

「はい。二度手間になっちゃいますけど、今から移動することを考えれば銀座線で動いた方が皆さんにとっても楽なはずです」

「どう思うね、間宮先生」

「萬世橋駅の存在は公安部に洩れていますからね。銀座駅から突入されるのも時間の問題でしょう。病人や老人のことを考えれば、一時的な退避場所として表参道駅に向かうのは悪い選択じゃない。幸い、ブルーシートならここに山ほどありますしね」

「それなら決まりだ。じゃあ小日向くん、先導役をお願いしているか」

「お願いされるまでもなく、元よりそのつもりだ。小日向は大きく頷いてみせる。」

久ジイは薄暗い構内の天井を見上げた。

「終つひの棲家すまかにするには寂しいところだと思っていたが、去るとなるとまた寂しいものだな」

それからの三十分間はちょっとした騒ぎだった。何しろ不平不満がありながらも数年間を過ごした場所だったので、急な移動を命じられて面食らう住人が続出したのだ。

「折角、ここの暮らしにも慣れたのに、どうして今更」

「今から表参道駅に移れって。冗談はやめてくれ」

「いきなり過ぎるよ」

「どうして被害者のあたしらが、国の都合であちこち移転しなきゃいけないんだよ。原発のせいであんなになったんだから、国がちゃんとした住まいを用意するのがスジじゃないのかい」

「おととい昨日から身体がしんどいんだよ。わたしだけ皆から遅れて出発してもいいかね」

二十人ほどが移転に異議を唱え、永沢と香澄だけでは説得できなかったので、間宮や久ジイも渋る連中の許に赴くことになった。

たかが百人、されど百人。住人全員の意味を統一させるのがこれほど大変だとは思ひもなかった。結局、住人全員の準備が整ったのは日付も変わった午前四時過ぎのことだった。

「こんな時間になったので、もうメトロの始発までは一時間とちよつとです」

一堂に会した（エキスプローラー）たちを前に、小日向は大声で注意事項を話す。薄暗がりの中でも、半数以上の者が不安げな表情を浮かべているのが分かる。

「皆さん全員を一度に移動させると迅速じんそくに動けなくなります。ですから全体を四つの班に分けます。それぞれ間宮先生、永沢さん、香

澄ちゃん、そして僕が先導を務めるので、どうかついてきてくださ
い」

小日向の若さが災いしてか、居並ぶ住人たちからは安心の色が見
えない。さすがに長老の久ジイが雰囲気を察して説明役を交代して
くれた。

「病人あり、わしのように老いた者あり、それぞれに身軽でないの
は承知している。しかし皆も承知している通り、国はわしたちを歓
迎してはくれん。腹立たしく、また口惜しいが、国というのは自ら
の過ちを認めようとしない。認めれば国としての体面を保てないと
本気で考えているからだ。体面を保つためなら、国は平気で道義を
踏みにじる。弱者の口を塞ふさごうとする」

やはり久ジイの人望は大したもので、住人たちはひと言も発せず
に耳を傾けている。

「怒りたくなるのも遣や瀬せなくなるのも当然だろう。かく言うわし
も腹が立ってしょうがない。しかし腹が立ったからといってここに
留まったのでは皆の身の安全を保証できん。命には代えられん。こ
こは耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍んで、従ってくれい」

説明を終えると、久ジイは深々と頭を下げた。白髪いただきの頂はみつ
ともなく地肌が見えている。

しかし、その頭頂部はこの上なく尊くも見えた。

移動の第一陣は小日向のグループだった。銀座線渋谷行の始発は午前五時十二分。住人は身の回りの家財道具やブルーシートを抱えているため、ずいぶんな荷物を背負つての移動となる。

通勤客に目撃されたくないの、四時台から神田駅の証明写真ボックスから一人ずつ出てくる。久ジイをはじめとして老人も混じっているの、なかなか思い通りには動けない。それでも始発の五分前には二十三人全員をホームまで誘導することができた。

始発とはいえ、早朝出勤のサラリーマンがホームに並んでいる。小日向たちは目立たないよう、一車両三人程度に分乗するつもりだった。そして小日向自身は、初めて萬世橋駅の構内に降り立った時と同じく作業着とヘルメットに身を包んでいる。

本来なら、他の乗降客や駅員の目がない深夜帯に移動したかった。しかし陸路にしても地下にしても神田から表参道までは十一駅、距離にして約八キロある。小日向や香澄ならともかく老人や病人が移動するには相当な距離だ。彼らの健康状態を考えれば始発電車を利用して移動するのが最善の策だった。

やがて始発電車がホームに滑り込んできた。小日向たちは何気な

い素振りですぐ電車に乗り込み、間隔を空けて座る。ただし久ジイは高齢で何があるとも知れないので、小日向が横についている。

始点の浅草から六駅目、神田駅で客を乗せても、まだ車内はまばらだった。早くも舟を漕いでいる者、ノートに目を通していている会社員、携帯オーディオに集中している若い女。お蔭で荷物を抱えたヘエクスプローターたちはさほど目立つ様子はない。無論、作業着姿の小日向はメトロの関係者だと思われているだろう。

だが小日向はホームに立った時からずっと緊張していた。

周囲に視線を配り、警察官らしい人影はないか注意を払う。自分たちの振る舞いが不自然でないかどうか、絶えず確認する。

皆の前では自信満々を装よそおっていたものの、やはり二十数人もの地下住人たちを先導するのは荷が重い。小日向巧としての生活も公務員としての立場も放り出したが、小さな性格が変わった訳ではない。公安部から逃げている事情を忘れたとしても、二十数人全員が無賃乗車している事実にも良心が悲鳴を上げている。

不安を感じ取ったらしく、久ジイが話し掛けてきた。

「そんなに怯おびえておつては却かえって怪しまれるぞ」

「でも」

「あんたがその恰好で萬世橋駅に侵入してきた時を思い出せ。あの時は大した度胸を發揮したんだろうが」

「それはまあ……」

「電車に乗るのは何年ぶりかな」

逃避行が始まったばかりだというのに何と平和な眩きか。小日向だけに聞こえるような小声だったので、少しだけ緊張が解れた。ほぐ

「萬世橋駅に住みついてからというもの、遠くの音を聞くだけで、電車とは縁のない生活をおったからな。小日向くんは電車通勤だったかい」

「はい。短い距離なので自転車通勤もできたんですけど、公共の交通機関を使わないと、途中で事故に巻き込まれても労災が下りないんです。それで」

「決まった時間に起きて、決まった電車に乗り、決まった時刻に出社して、決まった仕事をする。そういうことを繰り返していると、大抵の不安や心配事はどこかに消えていく。まっこと日常というのは大したものだと思わんかね」

「それって一時的に忘れているだけのような気が」

「一時的にせよ、忘れられるから大したものなんだよ。酒の力も妙なクスリも要らん。い人から苦痛を取り除くというのは、それだけで偉いんさ」

「アパートと区役所を往復している時は、そんなこと欠片も考えませんでしたよ」かけら

「考える必要もないほど安らかだったからだよ」

久ジイの声は静かだが重い。小日向が、地下での暮らしぶりを知っているから尚更だった。

国策と迫られ補助金と地域振興で頬を叩かれ、安全神話で塗り固められた高速増殖炉が事故を起こす。これだけでも大した悲劇なのに、久ジイたちは陽光と人目を避ける生活を余儀なくされた。恨み辛みを言う相手は霞かすみが関せきの城に閉じ籠もり、国は八ヶ部町民とその身に降りかかった悲しみを決して顧みかえりようとしない。

いったい何が政治なのかと思う。いったい何が行政なのかと憤いきまじおる。

小日向が「ヘクスプロラー」にある種の責任感を抱いているのは、おそらく自分が公務員だからなのだろう。本来、国や行政が護らなければならない人々が、逆に国によって迫害されている。そんな境遇に落とされた彼らを見て、何もできない自分が嫌だったのだ。

手助けをしようと決めた時、損得勘定はなかった。若さゆえの無思慮と嗤わらいたければ嗤うがいい。決めた時には義務感と倫理観が背中を押してくれた。損得勘定で流されるよりは、よほど心地いい感触だった。

仕事でも生活でも、自分の良心と倫理を問われる局面は多くない。だからこそ組織や上司の命令にすんなりと従えるし、よほど繊細な

神経の持ち主でない限り三度三度の飯が自己嫌悪で不味まずくなることもない。

だが小日向にとって久ジイたちの存在は、己の良心の価値を問いただすものだった。普段の業務で生活保護申請の窓口に座っているから尚更だった。

自分は救うべき人間を見逃していたのではないか。

自分が救えたはずの人間を見捨てていたのではないか。

原子力行政の被害者である久ジイたちを見ると、そうした自責に駆かられるようになった。申請者の一人だった紅林典江に思わず肩入れしてしまったのは、その反動に相違なかった。

「小日向くんよ」

物思いに耽ふけっていると、また久ジイが話し掛けてきた。

「わしは八ヶ部町の町長でもなければ、前職が議員や弁護士という訳でもない。ただの百姓だ。それでも長老とかで皆が一目、いや半目くらいは置いてくれる。それは何故かというとな。齢いぢもくだけは食っているから、そいつの人となりくらいは分かるからさ。初対面の人間であつてもふた言み言話せば、大体分かる」

最初に久ジイの面接を受けた際、こちらの内面まで見透かされるような怯えを感じたのは確かだ。今では自分の勘が正しかったと思える。

「それにな。若いうちは本音を隠す手段が拙いから、どうしても考えていることが顔に出やすい。今、あんたが考えていることもうっすらと見える。小日向くんよ。あんたは今、自分の行いが本当に正しいのかどうか悩んでいるんじゃないのか」

決意はした。

柵しがらみ も忘れようとした。

しかし未練があるのも、その通りだった。

「……元々、趣味以外には優柔不断なところがありました」

「優柔不断は悪いこっちゃやない。色んな立場、色んな人間に目を配ってれば決断が鈍るのは当たり前さ。即断即決、独断専行、剛毅果ごうぎ断だんなんてのは英雄視されがちだが、そういう英雄は往々にして悲劇を呼び起こす。今回の移住について小日向くんの意見に従おうと思っただのは、その優柔不断を信じたからだ。優柔不断な人間が最後の最後に決めたことなら信用する価値があると思っただからだ。だから小日向くんは悩まんでもいい。それで失敗したとしても、あんたを信じたわしの失敗だ。決してあんたのせいじゃない」

不意に目の前が熱くなった。だがメトロの作業員が車内で泣いていたら人目につくので、必死に堪えた。

二十分後、電車は表参道駅に到着した。小日向は電車を降りてから地下住人の数に間違いがないことを確認する。

よし、全員揃っている。

小日向は何気なくホームを見回す。始発であるせいか駅員の姿は見当たらない。もちろん監視カメラは作動しているだろうが、作業着にヘルメット姿でいれば保守点検作業中しか映らないだろう。

とにかく不審な動きは厳禁だ。小日向はさも手慣れた風を装いながらホームの端に歩いていく。

端は扉のついた壁で行き止まりになっている。この壁の向こう側が、臨時の隠れ場所と定めた旧表参道駅のホームだ。無論、関係者以外は立ち入り禁止なので入口は鍵が掛かっている。

小日向は何の躊躇ためらいも見せず、線路に下りる。一般乗降客が線路に下りれば大騒ぎになるだろうが、作業員なら見咎みとがめられる惧おそれはほとんどない。

線路上から眺めると新ホームと旧ホームは完全に地続きで、二つを隔へだてているのはたった一枚の壁であることがはっきりする。旧ホームを資材置き場へだにしているのだから、行き来が簡便でなければ用をなさないからだ。

だからこそ付け入る隙がある。

小日向は事もなげに旧ホームへと上る。こちら側の照明はないが、新ホームからこぼれる明かりで充分に見通せる。

二つのホームを隔てる壁に近づき、ドアのノブを回す。新ホーム

側で鍵が掛かっている、旧ホーム側からはノブを回すだけで開錠できる仕組みだった。

開錠すると、早速久ジイが入ってきた。

「呆気ないほど簡単だな」
あつけ

旧ホームに入るなり、おどけた口調で言う。

「神田駅の証明写真ボックスもそうだったが、地下鉄というのはどこもこんな風に入りが簡単なのかね」

「保守作業との兼ね合いがあるので、関係者に限っては出入りしやすくなっています。もっとも僕たちは完全に違法行為なんですけど」

「小日向くんがこちら側の人間で助かったよ」

「それ、褒め言葉じゃないですよね」

久ジイに続いて他の地下住人たちも次々と新ホーム側からこちらに入ってくる。

「思ったより広いな」

「資材が邪魔だが、まあ動かしやいいか」

「案外、片づいとるな」

頻繁ひんぱんではないにしろ、資材の運搬で行き来があるせいか閉口へいこうするような散らかり方ではない。埃ほりっぽいのを我慢すれば数日は寝泊まりも可能と思える。

全員が移動し終わったのを確認すると、再びドアを施錠する。ゆ

すっかりしてはられない。これから急を要する作業が待っているのだ。

「次の電車が来るまで十三分しかありません。皆さん、急いでください」

小日向の声を合図に、地下住人たちはそれぞれ持ち寄ったブルーシートや段ボールを広げ始めた。これから即席のハウスを作り、その中に身を隠そうというのだ。通過する電車からは丸見えになるが、元々資材の並んでいる場所にブルーシートが並んでいてもさほど違和感はない。長期間は無理でも二、三日程度ならやり過ごせるというのが小日向の読みだった。

久ジイのような老人も混じっているが、全員ハウス作りは堂に入ったもので、ものの十分も経っていないのにブルーシートの連なりが出来上がっていく。

いや、感心してばかりはいられない。

第二陣の到着時間がすぐそこに迫っている。

「あと一分で次の電車です」

完成したものの未完成のものに拘かかわらず、小日向以外の全員がハウスの中に身を隠す。新ホームの方から電車の音が近づいてきた。

小日向は無意識のうちに息を潜める。新ホーム側からこちら側を見ることはできないから、乗降客の目を気にする必要はない。問題

は先頭車両にいるはずの運転手だ。彼が旧ホーム側の異変を察したら、すぐに撤収しなければならぬ。

呼吸を浅くしたまま、電車の発車を見守る。ゆつくりと動き出す車両。すれ違いざま、一瞬だけ先頭にいた運転手と目が合った。

咄嗟とつさに片手を挙げると、運転手も軽く手を挙げた。彼の表情を見るに、疑われはしなかったようだ。

電車はスピードを上げ、やがて小日向の視界から消えた。通過音が遠ざかるのを見計らってハウスの中から久ジイが顔を出した。

「どうだったね」

「どうやら怪しまれずに済みました」

その時、ホームの壁のドアを開けて香澄が姿を現した。

「第二陣、到着う」

香澄はおどけた口調だったが、虚勢なのが丸分かりだった。

「次の電車の到着まで時間がない。早くハウス作りを急がせてくれ」

「了解」

第二陣の地下住人を旧ホーム側に招き入れ、彼らも作業に参加させる。人数も増え協力し合うから作業効率も上がる。急いそごしらえながらハウスの連なりが更に伸びていく。

九分後、第三陣が到着した。今度の先導役は間宮だった。

「老人と病人に異状はないか」

開口一番の言葉がそれだった。今のところ具合の悪い者は出ていないことを聞くと、間宮は脇目も振らずにハウスの中に入っていく。

これで全住人の七割は到着した。残すは永沢の先導する最終組だけだ。ハウスは着々と出来上がり、無駄のない動きはまるで統率された軍隊を彷彿とさせる。どうなることかと危惧していたが、この調子なら計画通り事が進みそうだった。

「もう脱いだら？ それ」

いつの間にか横にいた香澄が話し掛けてくる。

「作業着もヘルメットも寸法合っていないんじゃない」

「仕方ないよ。ネットオークションで一着きり出品されたのを入手したものだから、サイズまでは贅沢言えない」

「じゃあ、それって本物だったんだ。偽物にしてはよく出来てると思った。でも、やっぱりブカブカ」

「似合おうが似合うまいが、まだ永沢さんたちが到着するまで変装は解けない。何があるか分からないし」

次の到着予定は八分後だ。小日向はスマートフォン時刻表示を見ながら、永沢たちの到着を待つ。

「この分なら、全員無事に到着しそうだね」

やはり不安だったのだろう。香澄の声は心なしか弾んでいた。

「正直言って、百人の移動なんて無理だと思ってた」

「僕も正直言つて……」

「小日向さんは言っちゃ駄目」

「どうして」

「あなたが本音を言ったら、皆が不安がるじゃないの。あたしも含めて」

ああ、そういうことかと合点する。

いつの間にか頼られているのだ。久ジイからも、香澄からも。

こんな頼りない男をよくも信頼してくれるものだと思う。久ジイの励ましと香澄の叱咤しつたが己を奮い立たせてくれる。

あと五分。

全員が揃ったら、取りあえずここを拠点に待機してもらおう。そして夜を待ち、深夜過ぎになったら今度は博物館動物園駅を目指す。

その地こそが、〈エクスプローラー〉の新天地になる予定だ。

あと四分を切ったところで、突然スマートフォンが着信を告げた。驚いて表示を見ると、相手は永沢だった。

慌てて通話ボタンを押す。

『すまん。そっちに行けなくなった』

「どうしたんですか、いったい」

『警察に踏み込まれた』

向こう側の声が反響している。まだ永沢たちは萬世橋駅の構内に

いるのか。

『神田駅に行く途中で両側から挟まれた。公安部かどうかは分からないが、かなりの数だ』

「逃げてくださいっ」

『挟まれているから逃げようがない。もう駄目だ。俺たちのことは諦めろ。そっちに残った者だけでも何とかしてくれ』

「そんなこと言っても」

『頼むぞ。お前だけが頼りなんだ』

その言葉を最後に通話が切れた。

(つづく)